

vol.52 2021 秋号 源流からのたより

# ぽたいたい!

源流のひとしづく

守るべきもの

## Key Word

- 「吉野川源流一水源地の森」は禁漁です
- フィールドを持って、深くつきあいながら学生たちに学んでもらいたい
- みんなで、なんとかすべき時
- 源流学の教科書を作る
- 「山の神」から伝える
- 企画展「川上村の外来生物」での取り組み



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

森と水の源流館



奈良県吉野郡川上村宮の平  
<http://www.genryuu.or.jp>

# 「吉野川源流 水源地の森」は**禁漁**です。

このたび吉野川（紀の川）源流、川上村内の三之公川上流区域が、禁漁区域となりました。管理棟の上流側壁面を延長したラインからさらに上流側すべてが禁漁となりました。釣りを楽しみにお越しいただく方には恐縮ですが、ご理解いただきありがとうございます。



禁漁区域の指定は、川上村漁業協同組合から奈良県への申請を経て認可を受けたものです。組合長堀谷正吾様をはじめ、組合員のみならず、また今回きっかけとなる、つよいおもいで提言をいただいたネイチャーフォトグラファー内山りゆう様に深く感謝を申し上げます。

先人から守り続けられてきた貴重な水源を守ることを目的に、川上村が天然林約740ヘクタールを買い上げて「吉野川源流-水源地の森」として条例を設けて保全していますが、河川内は制限外となるため、これまでは溪流釣りの自粛を呼びかけ、協力をいただいでいました。

すでに亡くなられた方を含め多くの方より禁漁化へのおもいを授かってまいりました。これを引継ぎ、さらに啓発につながる活動や調査を進めながら、この森の価値、ひいては川上村の価値を伝え、守っていきけるようにしなければと、あらためて襟を正しました。



## 👉「さとふる」に登録しました！

2021年8月から、ふるさと納税ポータルサイト「さとふる」におけるお礼品として森と水の源流館「源流人会」（家族会員）に登録しています。川上村へのふるさと納税の用途の選択項目に「環境の保全に関する事業」も新たに加わりました。これからもみなさまのお力をいただき、「水源地の村」の環境保全に取り組んでまいります。



## 奈良教育大学

社会科学教育講座(地理学)准教授

## 河本大地さん



村での活動が長く続いています。その魅力は

ここでは源流や水源地に関わる「都市側」から見た源流の村への思いや視点を紹介しています。今回は、学生とともに地域に入り込んで学ぶ仕組みづくりに取り組む河本さんです。

——どんな取り組みをされていますか

大きく分けると三つあります。一つ目は、地域と深くおつきあいしながら、学生たちが地域から学べるフィールドづくりをすることです。川上村とのおつきあいは十五年ほどになります。暮らしの知恵や技を学ばせていただいています。

二つ目として、地域の価値や地域の未来像の整理をしています。たとえば地質や気象気候など関心のある人から、地域をもっとよくしたい人までが一緒になったジオパークの活動や、地域をSDGs(持続可能な開発目標)の視点で再評価する取り組みです。

三つ目は、学校教育です。特に地理教育や地域学習、「へき地・小規模校教育」の課題を緩和し、可能性を切り拓く活動をしています。

——川上村との出会いは

地域活動をしていた大学院生のころ、神戸に新設される大学から専任教員就任の依頼があり、準備段階から携わることになりました。私は岡山生まれで大学も広島だっ

## フィールドを持って、深くつきあひながら学生たちに学んでもらいたい。

たことから、少しでも関西とのつながりを持ちたいと、環境教育に興味のある人が集まる「千刈ミーティング」に参加し、源流館の職員と出会ったのがきっかけです。かれこれ15年ほど前になります。「自然環境保全論」という授業で、達ちゃん(森と水の源流館元館長の辻谷達雄さん)に、山のことや暮らしなど、いろいろと語ってもらい、一緒に汗をかきました。山とともに生きてきた達ちゃん言葉は学生たちの心に響き、この出会いは本当に有難かったです。

川上村は、源流館が地域の方々と連携し、受け入れ体制がしっかりしているの

で、外の人に対して開かれている感じがします。大学と行政間で協定を結ぶより、地域の方々と接しながら関わりをつくっていくことが大事ですね。昨年はコロナ禍で十分にはできませんでしたが、上谷地区の神社や道路に落ちた枝葉を掃き、豚汁やおし焼き芋をほおばりながら、話すことで、お互いにとって、忘れがたい経験になっています。

——今後、期待したいことは

川上村は、社会全体の中でのポジションをよく考え、「川上宣言」として表現し、発信しています。これは素晴らしいことで、私も学生に、村の価値やここで学んでほしいことをしっかり伝えることができます。しかも行政だけでなく、外部の人も含め、いろんな人ものになっていきます。環境基本計画では行政が取り組んでいることをしっかり位置づけておられますが、村の暮らしの中で育まれてきた民俗知も大切にしたいです。

ダムのことも含めて、プラスもマイナスもあったけれども、川上村の軌跡は世界に貢献できる貴重な内容を持っており、世界各地の未来づくりに生きているのではないのでしょうか。超ローカルに物事を見ながら、グローバルとつなぐ。そんな視点を持つ時代がもう来ていると思います。

### ■プロフィール

奈良教育大学准教授 社会科学教育講座(地理学)

農山村地域研究、観光・地域づくり、ESD。地域の多様性を活かして社会の未来を創るべく、地域資源の守り方・使い方や地域振興、ツーリズム、地域学習、地域理解、ジオパーク、有機農業などに関する実践的研究を行なっている。令和2年度より川上村環境審議会副会長



学生を連れての川上村フィールドワークでは毎年地域の方々とのふれあいを重視



# みんなです、なんとかさすべき時。

—きれいな川を守っていくために—

川上村住民課、水源地課  
森と水の源流館スタッフ  
意見交換会から



## えっ、これが主役!?

いいえ、そうではありません。「源流の主役」の原点は、川上村の森に生まれるかけがえのない水であり、

美しい川であることは、今も未来も変わることがあってはなりません。しかしここ数年、川上村の河川でキ

ャンプやバーベキューのゴミが放置されている光景が多く目につくようになりました。支流のどんどん奥の方でも、そのような心ない行動があります。そこで今回、まずはみんなでその状況を共有し、考え、動き出していこうと、川上村役場の環境部門担当の住民課と、水源地課にご協力をいただき、勉強会を行いました。

### そのまま放置の例も

もちろん、以前から自然を楽しむために川上村に来てくれる人々は多く、ほとんどの方はマナーのある人たちが「来た時よりも美しく」を心掛けてくれていると思います。近年のキャンプブームと、あまりにも手軽に安価でバーベキュー道具が買えることなどから川原に残りの食材やアルコールの缶や

ビンとともに、そのままの状態に放置する酷い例もみられます。コロナ禍では「自然の中なら大丈夫」と思う人も多いですが、受け入れる側として、近隣町村ではバーベキュー施設を閉鎖している所もあり、いま上流へと人が寄せてきているように思われます。

### 村では地道な対策

川上村（役場）では2009年環境基本条例を制定。通年、シルバー人材センターにお願いをして、「環境パトロール」を実施し、ゴミの回収にもあたっています。また夏休みの時期には、広報車からの呼びかけや、ゴミ袋を配り、持ち帰りを呼びかけてきました。それでも悪質な放置が増えてきたので、監視カメラの設置なども考えています。

## 自ら片づける村民の方々

村民の中には、根気強く自らゴミを片づけてくれている人たちがおられます。役場では川上村と交流のある大学生にその声を届けてみようと思いい、インタビュ動画を撮らせていただきました。(その動画をみながら視聴。印象に残る言葉を左に紹介します。)

「ひと夏で、バーベキューのアミが100枚ほど集まる」

「暮らす者が迷惑する」「ゴミは持って帰れ!と言いたい」

「マジメにやっている人には不快な気分をさせたくないが」

「この川の水を見てもらって、それぞれで何か感じてほしい」

「下へ流れて行って、自分たちがこの水を飲んでいることを…」

村民の率直な思いを伝えていただきました。森と水の源流館といっしょに授業づくりをされている小学校の先生からも教材として使わせてほしいという声もいただいています。源流の美しいところを伝えていくことも大事なことです。このような苦労と川や水に対する「おもい」を伝え、共有することができると、これから発展させていきたいと思っています。

## 源流館ボラさんも心強い

森と水の源流館でも、開館当時からボランティアアさんに参加いただきました。河川のゴミ拾いイベントを行いました。外部の人でも、ゴミ放置の状況にはいつも腹を立てていました。そのように共感をいただけの方々の味方になることで、川上村らしい対策にもつながるように思います。

ゴミとして残されたものの中には、違法に持ち出されたスーパーマーケットのカゴや、その日一度使われただけで捨てられたキャンプ道具があります。そのようなお店や道具メーカーとも協力関係をもって行えることもあるように思います。



## 「なんでアカンか」考えよう

本当に一部の人だけだと思います。「こんなことくらい」と思っている人がいるのでしようが、その先にどんなことがあるのかイメージする力を持つてもらいたいですね。「だれが片づけてくれるか」「どんな気持ちで片づけてくれるか」「駐車で迷惑をかけるいけないか」「残したガラスで、子どもがケガをするかも」「土や川を汚していること」そして、「川の水は、下流へと流れて行くこと」

逆に、だからこの光景を子どもたちへの学習の教材にしていただけ

のかもしれない。子どもたちだけでなく、キャンプやバーベキューに来る人々への教材とすることもできるのではないかと思います。川上村役場と森と水の源流館では、引き続き、村民のみなさんのご意見を集めながら、水源地の村からのメッセージをまとめていきたいと思っています。



この記事は出席者の意見を用いながら、事務局長 尾上がまとめました

(2021年9月10日 森と水の源流館にて)

源流学教室



# 源流学の教科書を作る

6月12日(土) 朝日館にて  
 講師：河本大地先生(奈良教育大学)  
 報告：上西由恵

森と水の源流館を応援くださるボランティアさん向けに、専門家から川上村の魅力や取り組みについて話を聞き、意見を交わしながら知識の幅を広げ、技術を身に付けてスキルアップを目指す、源流学教室を開催しました。

## 「源流学」とは何か？

当館の行事等に参加された方や、源流学会会員の方であれば「源流学」という言葉を聞いたことがあるはずです。川上村の様々な魅力とその理由を考え、各々のイメージを教科書のようなものにまとめ、分かりやすく、伝えやすくしようというのが今回の試みです。村で生まれ育った方、移り住まれた方、あるいは当館を通じて関わるようになった方々が集まり、「吉野杉」「水源地の森」「きれいな水、おいしい空気」「古事記ゆかりの史跡」「川遊び」「ここで出会う人々」「後南朝の歴史」「田舎の生活」「観光要素」といったことが挙げられましたが、上手くまとめられるでしょうか。

## 今回、「地理学」の視点から

そこで、奈良教育大学の河本大地准教授に「地理学」の視点から川上村について分析していただき、ヒントをもらうことにしました。「地理学」は地域をさまざまな角度から研究する分野です。さらに詳しく見ていくと、吉野林業の市場・人気の観光スポットなどは経済地理学、吉野川の活用・過

お話しいただく河本先生



疎高齢化などは社会地理学、ハレの行事・郷土料理などは文化地理学、丹生川上神社上社跡・古い街並みは歴史地理学、鍾乳洞・降水量、トガサワラの分布・シカによる食害は自然地理学というように分けられます。また、地理教育として、山村地域の課題を身近な問題としてとらえ、持続可能な社会づくりをどう教えていくかということまで含まれます。

## コミュニティバスを使って

## 朝日館を会場にする工夫を試み

「源流学」はこのような体系があやふやで、知らない人には分かりにくい、伝わりにくいのもかもしれません。「吉野杉」は産業として経済に該当すれば、造林の手法を確立してきた文化にも、気候に適した品種として生物にも当てはまるので、分かりやすくしていくのはなかなか難しそうです。実は、この時間の中では川上村の良いところ、困っていることについて意見を出し合うまで、まとめることまでできませんでした。川上村の人にも知ってもらう、フリーペーパーを作る、SNSを活用する、当館の行事の中でもっと広報するといった意見もありました。村の人と自然の役割を知ろうえ



↑自然のかかわりが詰まった朝日館特製の昼食

では会場をお借りした老舗旅館・朝日館(柏木)やコミュニティバスのやまぶきバスを利用いただくのも一つの手段です。他の地域への通過点になっている、人口が減少している、地元と人と交流する機会が少ない、自然と観光の両立など、課題を解決する糸口になるかもしれません。皆様からいただいたご意見をもとに、河本先生と有志に協力いただきつつ、分かりやすい、伝えやすい『源流学の教科書』にまとめ、たくさんの人と想いを共有し、行動できますように。

←参加を呼び掛けたチラシ

その三八

歴史に詳しい職員、成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

# 「山の神」から伝える

## 受け継がれる自然への畏敬の念

三之公の「水源地の森」の山の神の祠は、森と水の源流館と同じ年に、前館長の辻谷達雄さんにより建立されました。祠の本体は洞ができた樹齢約300年の杉で、入之波地区の中平寛司さんが、「山の神の祠にしたら良いのでは」と取り置いていたものを譲っていただきました。河原石で台座の石垣を組み、ミツバチの巣にならないよう横に置いた本体を檜のような木に載せて固定していますが、同じ反りかたの木を2本探すのに苦労したそうです。そして側面に扉を取り付け、



「水源地の森」の山の神の祠  
祭神の大山祇神は代表的な山の神です。

洞の中に愛媛県の大山祇神社のお札と神祠を据え、鳥居に神額を掛けました。「山の神」は山に宿る神の総称です。男神もいれば女神もあり、岩石の神や木の神、鉾山の神や狩りの神もいます。また山林は水源でもあるので、山に住む神が山から下りてきて農業を見守るとい地域もあるなど、全国各地に様々な神がいて、広く信仰されています。

自然を相手とする山の仕事は、小さなことが大きな事故にもつながります。いくら念入りに段取りをつけ、細心の注意



板のお供えが飾られた山の神（東吉野村小栗栖）



オコゼ  
山の神には容姿にコンプレックスを持つ女神もいて、おもしろい面相をしている魚のオコゼを見ると喜ぶとされているので、山の神の祭りに遠く和歌山からオコゼを供えにきてくれた人もおられました。

を払っても避けられないこともありま。そのため山の仕事に携わる人たちは、山の神に仕事の安全を祈り、無事に仕事が終わられたことを感謝するのです。

当然、山林と共に生きてきた吉野にも山の神信仰があり、日本遺産の構成要素の一つにもなっています。

山仕事に携わる人たちは、仕事の前に山の神に安全を祈り、山の神が木の本数を数えるとされる1・6・11月の7日は仕事を休んで山の神の祭りを行います。柳・米・餅・魚・野菜・酒などを供え、餅まきをするときもあります。また、板で作った魚やノコギリなどを供えるところもあり、チェーンソー形の板が供えられているのを見ることがあります。森と水の源流館も「水源地の森」で森のツアーや調査といった山の仕事をしているので、入山前には必ず山の神の祠にお参りし、年3回、源流人会の人たちなどにも声をかけて祭りを行っています。

最近、川上村に遊びに来る人が多くなり、山の神の祠の近くでも人を見かけることが多くなりました。ただし、マナーの良い人ばかりではありません。ゴミを放置する人もいれば、入ってはいけない場所と知りながら入り込む人もいます。色々と対策が考えられてはいますが、川上村全ての場所と時間をカバーすることはできません。ただ、そういう迷惑な人たちでもやはり人の目は気になるように、人が多い場所ほどゴミは目立たないものです。

辻谷さんは、山の神は山仕事に携わる人だけの神様ではなく山で暮らす人たちすべての神様とおっしゃっています。

山の神から見れば、遊びに来た人もその時だけは山に暮らす人の一人です。河原のゴミを見るたびに、自分の行いは人だけでなく、山の神にも見られていると、山を敬う気持ちをもつてくれれば、より川上村の自然を楽しんでもらえるのではないかと感じています。

### 参考文献

辻谷達雄 2014 「達っちゃん語る 子供たちに伝えたい「源流学」

④山の神-2「ぼたり」第29号

柳田國男 1914 『山島民譚集』

『柳田國男全集5』 1989 筑摩書房

國學院大學神道研究会編 1974

『民間信仰 第二号(吉野川流域)』

**企画展**  
 (6/5 ~ 8/31)  
**「川上村の外來生物」**  
 での取り組み

本年度の企画展は川上村の外來生物をきっかけに、人と自然のつながりの大切さを伝えることを目的としました。「外來生物」のイメージが大きいです。人間の都合によって持ち込まれた結果です。それがどのように生態系に影響を及ぼすか、多くの機関・研究者にご協力いただき紹介しました。その中からムネアカハラビロカマキリの展示、関連イベントに協力いただいた大阪府立大学大学院の井岡さんのおもいをご紹介します。



2F交流広場での展示の一部

**企画展としらべ隊に關わって**

大阪府立大学大学院 井岡 来斗

あこがれの職業に關わることができて、学者を目指す者は誰しも教授職や研究機關の研究者、あるいは博物館の学芸員を夢見るものです。かく言う私もこの度の森と水の源流館からのお誘いをうけ、博物館の展示に学生の身分で携わるまたとない機会だと思いいつ返事で引き受けさせていたのだと言うまでもありません。

私が昆虫学者を志し始めたのは小学校に上がる頃でした。肉食の生物という強者に惹かれ、その中でも兎角カマキリに魅入られていました。数あるカマキリの不思議の中で何を追究したものか悩んでいた時、奇しくも外來種のカマキリが日本に侵入して話題になっていくことを知り、ムネアカハラビロカマキリを研究することになりました。この時、自分の研究が博物館の展示に關わる事になるとは夢にも思っていませんでした。

**企画展での成果発表**

人間は衣・食・住・娯樂など自然環境から多くの生態系サービスを受けていますので、生態系が変化すると少なからず影響を受けることとなります。目に見えにくいという点も相まって、気付かないうちに様相が変化してしまうことが往々にしてあるため、生物多様性保全は想像より深刻な課題なのです。今回の企画展では、日常生活を送っていく上で一見自分とは無関係に見える諸問題に対し、関心を持つきっかけになるよう、吉野地方で私が調査したムネアカハラビロカマキリの研究成果の発表をさせていただきます。生態系保全は人間の生活に無縁の代物ではないということをお伝えられていれば幸いです。

自分が行っている研究を研究者間で共有することは普段から行っていますが、こうして地域の方々に向けて発信できる機会というのは大変貴重で有意義でした。今後

調査を通して得られた知見を積極的に地域に還元していけたらなと思います。

**「関連イベント」**

**吉野川紀の川しらべ隊**

**「カマキリの種類と個体数をしらべよう」**

私がカマキリに心惹かれた頃と同じ年頃の子どもを対象に、カマキリを始め昆虫に関心を持ち、道端で出会った時に少しでも気に留める人が一人でも増えてほしいという想いと共に観察会に臨みました。身近な生き物の観察やふれあいを通じて、外來生物という大きな問題に目を向けてもらおうきっかけとなっていれば研究者冥利に尽きます。

白状すると、たとえ患者であったとしても、私の興味の矛先はカマキリという昆虫そのものに向いており、とりわけ学名不詳の上に詳しい生態すらわからないムネアカハラビロカマキリの全てが気になって仕方がないだけなのです。彼らの観察を通じて、不思議に思ったこと、興味を持ったこととことごとく追求する私の姿を見せることで、昆虫学者を目指す子どもを増やすきっかけに繋がっていたら嬉しく思います。



7/17吉野川紀の川しらべ隊にて (写真右が井岡さん)

**源流人募集**



**源流人とは** かけがえない水を生む源流の自然とそこから海や都市へとつながる様々なものを愛する人です。

**源流人会とは** 集い、話し、学び、遊び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

**2021年度更新特典は川上村の自然をドライフラワーでお届け!**

|    |         |
|----|---------|
| 個人 | 2,000円  |
| 家族 | 3,000円  |
| 学生 | 1,000円  |
| 団体 | 10,000円 |

年会費 郵便振替 00940-1-331163

**次号森と水の源流館20周年記念号へ一言メッセージをお寄せください**

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

ここにご記入いただき写真に撮ってEメールでお送りください (令和4年1月末締切り) morimizu@genryuu.or.jp

表紙の写真: 「吉野川源流-水源地の森」の下流側の端っこです。水源地の森から生まれた水が下流へ流れていきます。

発行日:令和3年11月16日(川上村 源流の日)  
 発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館  
 TEL:0746-52-0888